老梅山吉峰寺：老梅山吉峰寺の概要

吉峰寺は、禅宗・曹洞宗の開祖である道元禅師が1200–1253）が1243年に越前（福井県）に到着後、禅の修行に従事した場所である。境内には、道元禅師が坐禅をしたと言われる大きな坐禅石があり、現在も参拝することができる。

13世紀、寺には最小限の設備しかなかった。最も近い竈は、およそ2キロ離れた山の麓の村人の家にしかなかった。 寺に住む僧侶のためのお粥を準備するために、徹通（てっつう）（1219–1309）という名の僧侶は、1日2回、村まで往復した。 炊事、掃除、入浴などの日常的な作業を心からこなすことは、古くから、曹洞宗では重要なことであった。徹通（てっつう）にとって、山の往復は日常の修行の一つに過ぎなかった。 村人たちは彼の献身に驚き、山道を「徹通坂」（てっつうざか）と呼び始めた。約900メートルの険しい山道には、慈悲の菩薩である観世音菩薩のさまざまな姿を描いた33体の石像が並んでいる。 徹通は永平寺の第三代住職を務めた。

1244年、道元禅師は新たに開山された大仏寺：永平寺の前身に移った。 道元が離れた後、吉峰寺はほとんど放棄され、徐々に荒廃した。 数世紀後の1892年、永平寺で修行していた田中仏心（1867〜1914）という名の若い僧侶が吉峰寺を訪れ、廃寺になっていたことに衝撃を受けた。 仏心は、全国各地の僧侶に復元の援助を求めた。 仏心の努力の結果、1903年、道元禅師650回忌を記念し、「法堂」（達磨堂）が完成した。 残りの修復作業は1907年に終了した。

吉峰寺の特徴は、開山堂が一般公開されていることである。 ほとんどの寺院では、開山堂への入堂は特定の階級の僧侶にのみ許可されている。 永平寺の開山堂と同じように、開山堂の祭壇の中央には道元禅師の大きな像が安置されている。 通常、そのような彫像は幕で隠されているが、吉峰寺では完全に公開され目にすることができる。